

# 所沢高校 公開講座

## 三島由紀夫『美神』を読む

「世にも奇妙な物語」にありそうな、とても短い作品です。命がけで「美」を追求した三島が、『美神』というタイトルをつけたこの作品に込めたメッセージとは？

小説読解の方法を、一般の方にも解りやすくお話しします。中高生の方も歓迎します。

担当：所沢高校国語科・佐藤 功

### ★『美神』が掲載されている書籍

- ・新潮社 決定版 三島由紀夫全集〈18〉短編小説(4)
- ・河出文庫 三島由紀夫集—文豪ミステリ傑作選
- ・筑摩書房 新・ちくま文学の森 2 奇想天外

※入手しにくいと思われるので、次のページから本文を掲載してあります。

### ◆参加費：無料

本文と資料は当日プリントでお配りしますが、作品を事前にお読みになったうえで、ご参加くださると、より解りやすくお聞きいただけたと思います。

○日時場所：1月12日 土曜日  
14:00～15:30  
所沢高校1号館2階 会議室

### ○申込方法：

#### 1、電話の場合

1月7日(月)～11日(金) 8時30分～17時  
**04-2922-2185**

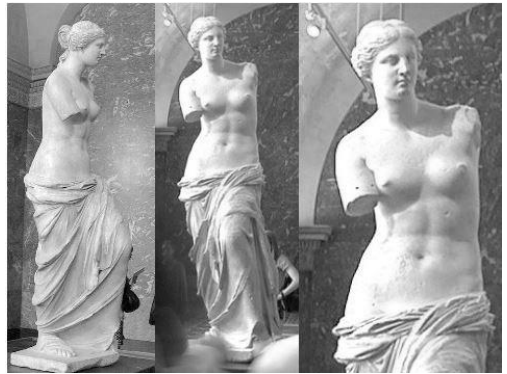
①お名前 ②講師急病による中止など、緊急の場合の連絡先 ③人数 をご連絡ください。

#### 2、メールの場合 いつでもお申込みいただけます。

下記のアドレスに、上記の①②③の内容をメールしてください。なお、アドレスが前回までと異なります。ご注意ください。

[bungei@tokorozawa-h.spec.ed.jp](mailto:bungei@tokorozawa-h.spec.ed.jp)

ミロのビーナス



三島由紀夫



## 美神 三島由紀夫

R博士はドイツ人で、ライン流域のデュッセルドルフの人である。永くイタリアに定住し、そのおびただしい著作の数は、古代彫刻の権威の名に背かない。

八十三歳の博士は今、臨終の床にある。しかし病褥に近づくことを許されているのは、美術愛好家の若い真摯な医者N博士一人である。

R博士の住居は、ローマ市ルドビシ通りにある。ここは古ローマの都門を残すボルゲーゼ公園に近い閑静な一画で、博士のアパートメントは四階の三部屋にわたっていた。

ローマの五月は暖かいと言うよりも、暑いと言ったほうが適当なほどである。強烈な明るさが遍満し、人々は街路樹の深い木陰を選んで歩く。みかん水を売る者が街角に車を出し、空は終日雲の陰をとどめない。廃墟の上にはおびただしいつばめが飛び交わし、幾多の古い泉は豊かな清水を装飾の彫像の全身に浴びせている。博士の住居の近くにはローマの泉の源と言われるトリトンの泉がある。また名高いトレビの泉に、ローマ離京の前夜貨幣を投げる者は生涯のうちに再びローマを訪う巡り合わせになるという口碑がある。

博士はこの泉に貨幣を投げたことは一度もない。その必要を認めなかったからである。ローマを終生離れない運命を自ら選んでいたからである。

病室の窓には午後の日が真っ向から差している。日覆いが下ろされて、室内は暗い。しかしまくら元の水差しの水はたちまちぬるみ、博士の額には汗がぬぐわれるそばからかすかににじんだ。

死に瀕している荘厳な顔は、こわいひげの中に埋もれている。深いしわも、高い倨傲な鼻も、落ちくぼんだ眼窩の底に微光を放っているひとみも、大地の起伏を圧縮したように静かである。近づいている死の兆しの、最も明瞭に刻まれた部分がある。それは胸の上に置かれた手である。弾力を失った静脈が、手の甲を縦横に走っている。汚斑の多い白い皮膚がこの静脈の形を、無力に、しかし正確になぞっている。この形骸だけになった手の内部には、生命はすでに失われているように思われる。

「もう一度見せてくれ。もう一度別れを言わせてくれ。」

博士は痰の詰まった聴き取りにくい声でそう言った。N医師は、言葉を聴き分けずとも、博士の言わんとしているところが分かる。

彼は病褥の傍らのいすを立った。壁際に寄せてある台座の所へ行く。台座の下には四輪の小さな車がある。彫像が押されると、車は絨毯の上を音もなく回り出す。Nは自分の座っていたいすをどけて、その位置に車を止めた。R博士はひとみを巡らしてそのほうを見た。

台座の上に立っているのは、大理石のアフロディテの像である。十年前、ローマ近郊の発掘に当たって、博士がこの像を発見した。その発見は近代の奇跡であった。像はローマ国立美術館に納められた。十年来、週に一度、この大理石像に会うために老博士は美術館へ通った。病のあついことを聞いて、美術館は特例をもって、像に最後の対面をさせるために、それを博士の病室へ運んだのである。

室内の薄明の中に、アフロディテの像は白い模糊たる形態を浮かべている。右腕が失われているほかは、ほとんど完全に原型を伝えている。その目は羞恥のために半ば伏せられているが、それがあたかも病床の博士を、冷ややかに見下ろしているように見えるのである。

R博士は、手を差し伸べて、慌ただしく本のページをめくるようなしぐさをした。死がせき立てているので、日ごろの落ち着いた挙措は失われている。辛うじてこう言った。

「私の著書を、私の著書を……。」

N博士はモロッコ革にフィレンツェの捺金の細工を施した大部の一冊を取り上げた。

「読んでくれ、百七十ページだ、早く。」

N博士は若々しい声で、日覆いのわきから漏れる光の下へ、開いたページを差し出して、読み始めた。

『……………』

かくて我がアフロディテについて語る段階に至ったことは、著者の無上の喜びである。これこそは二十世紀に入って発見せられたギリシャ古典時代の唯一の傑作であり、優雅と品格において、クニドスのアフロディテに匹敵するものである。比類なき優婉は、一抹の神秘と悲哀を宿し、神聖と官能のえも言われぬ一致は、プラクシテレスの原作たるを疑わしめない。これはローマ時代の最上の模作であり、また今のところ、残された唯一の模作である。この無上の美については、ただ我が目に見た者だけがこれを知り、いかなる言葉をもってしても、それが与える感動を他人に伝えることは不可能である。しかもローマの古い土中からこれを発見し、近代の人間にして最初にこの至上の美に直面した者の戦慄を想像されたい。

さて像の高さは、二・一七メートル……。』

「そこまでいい。そこまでいい。」

R博士は濁った叫び声を上げて、手を振って、朗読を中断した。

「次はS博士の著書を。」

Nは書架を探して、取り出した一冊のほこりを部屋の一角で払った。日覆いのはじから漏れる光はほこりを舞わせた。

「わしのアフロディテの章を読むのだ。早く。」

『……さてR博士の発見にかかるアフロディテは……。』

「そこじゃない、背丈を読むのだ。」

Nは不審気な顔を向けた。

「高さをですか。」

「そうだ、早く。」

『像の高さは、二・一七メートル。』

「それでいい。今度はオクスフォード大学のE博士の著書を。」

「やはり、高さだけを？」

「そうだ、早くしてくれ。」

Nは次の一冊のページを、窓のほとりで繰った。そして読みかけて、戦慄した。その数字が、怪しい呪文のように思われたのである。

『像の高さは、二・一七メートル……。』

……R博士は目を閉じて聞いていた。不意にこの瀕死の胸の底から笑いがわいた。彼はふさがれたのどから、恐ろしい笑いを笑った。笑いは、早くも死臭に満ちたような部屋の、黄ばんだ腐敗した空気を押し揺るがした。

N博士は駆け寄って、その手を取った。落ち着かせようと試みながら、こう言った。

「博士、どうなすったのです。しっかりしてください。」

「これが笑わずにいられるか、N博士。」——彼は言い知れぬ嘲りと陶酔の表情をした。「あいつら、ヨーロッパの一流の碩学どもは、私の著書からただ引用したにすぎんのだ。だれ一人自分で測ってみた者はおらんのだ。」

聞いてくれ、N、わしのアいまわの懺悔だ。半世紀の間、わしは学究をもって聞こえていた。わしの研究はことごとく精確だった。わしは曖昧な独断を憎み、ペイタア流の甘い主観的な美学を憎んだ。わしの著書のどこを探しても、一字の誤植でさえ見つかるまい。……しかしこのわしが、一生に一度、自ら好んで過ちを犯したことがある。このアフロディテを御覧。」

Nは薄明に浸された、名状し難い美神の横顔を目近に見た。

「……分かるだろう。わしがこれを発見したときの驚きが。わしはこの美が公共のものたるべきを知っていたし、わしがまたそうなるように努力するだろうことを知っていた。だが、分かるか、N、最初の一瞥以来、わしはこのアフロディテの魅惑のとりこになった。わしは彼女と個人的な秘密を分かちたかった。どんな些細な秘密であれ、わしとアフロディテ以外、何者も知らない秘密を分かちたかった。……わしはとっさにたくらみを巡らした。手ずからその高さを測った。像の高さは二・一四メートルあった。しかるにわしは、世界の学界へあまねく、三センチ多い尺数を公表したのだ。……そうだ、測ってみるがいい。そんな疑わしそうな顔をするなら、測ってみるがいい。」

R博士の顔は汗にぬれて、狂おしく紅潮した。

「机の上に物差しがある。細い三メートル弱の板がある。定規がある。像の足から直角の所へその板を立て、頭の頂点から地面に水平に引いた線が、その板に交わる所に印を付ける。それだけでいい。さあ、測ってみるがいい。早く……。」

N博士は言われたとおりにした。

瀕死の者は、まくらから頭を浮かせ、あえぎながら、この作業を見守った。

「測れたな。」

R博士は言った。

「はい。」

「何メートルだ。」

N博士は物差しを丹念に見た。

「ちょうど二・一七メートルです。」

「何？」

R博士は青ざめて、叫んだ。

「そんなはずはない。何かの間違いだ。何をしている、もう一度測るんだ。」

Nは再び定規を手にして脚立へ上がった。

「まだか。」

死がすでに、R博士の後ろ髪をつかんでいる。

「まだか。」

「もう少しです。」

Nは脚立を下りてきた。

R博士は、青ざめて、はやほおが引きつっている。

「まだか。」

「済みました。」

「何メートルだ……。」

「ちょうど、二・一七メートル。」

Nは故知れぬ恐怖に打たれた。もしR博士が真実を語ったとすれば、像はおのずから三センチだけ育

ったのである。

……しかし年若い彼はR博士の顔を冷静に眺めた。そこにはすでに錯乱の兆しがあり、この明白な錯乱のほうが、信ずるにやすかったのである。

R博士は、この世ならず美しいアフロディテを、半ば瞳孔の開いた恐ろしい怨嗟の目で見つめていた。ようやく、とぎれがちに、しかし十分毒々しく、こう言った。

「裏切りおったな。」

これが最後の言葉になった。

R博士はこと切れた。N博士はひざまずいて、この異教徒のために祈った。R博士は終油を受けることをがえんじなかったからである。

やがてN博士は立って、涙にぬれた顔を、扉の外に待っていた人たちに示した。人々は死の部屋に雪崩込んだ。

最初にその部屋へ入った婦人は金切り声を上げて立ちすくんだ。

R博士の死に顔があまり恐ろしかったからである。